

幸福とは、所有するものか、状態か、行うものか？

クリスチャン・ボードウロ

訳：山上浩嗣

仕事とは、仕事以上のものである。

仕事は、マルセル・モースが言ったように、「社会とそのさまざまな機構の全体に活気を与える」主要な社会的事象のひとつである。仕事は人々の人生において本質的な位置を占める。歴史的に労働時間の減少という傾向があるとはいえ、いまでも一般的に、成人以後の人生の半分以上の期間にわたって、一日の時間のうちの大部分が仕事にささげられている。職業のひとつひとつに給料や収入の水準が結びついていることからして、仕事は生活水準を規定するものとなる。文化面の生活から見た階層秩序や、社会的な階層分布に関するほかのさまざまな基準も重要ではあるが、仕事は、長きにわたって、人々の社会的アイデンティティ——つまり他者の目に映るそれ——において大きな比重を占める原則であり続けている。そしてそれは、個人的アイデンティティにおいても同様である。人格と職業を同一視させる力はきわめて強く、日常言語においてもそのような力が浸透するようになってきている。「私は教師である」、「私は魚屋だ」、「私はレジ係です」、というように。

仕事はまた、既成の社会的区分の基準ともなる。雇用者 (patrons)／被雇用者 (salariés)、肉体労働者 (manuels)／知的労働者 (intellectuels)、裕福な者 (riches)／貧しい者 (pauvres)、都市生活者 (urbain)／田園生活者 (rural)、熟練者 (qualifiés)／未経験者 (non qualifiés)、経営者 (dirigeants)／従業員 (dirigés)、などがそうだ。仕事は、さまざまな社会的集団の間の、世俗的で日常的な対立のトポスなのである。

.....

仕事の場合は、社会においても個人の生活においても変化してきた。一方で、その場は増殖している。かつては、きわめて大部分の女性が、家庭内空間において占める位置によって規定されていた。つまり、家庭の母、某の妻、未婚の母、などである。今日では、完全に職業的アイデンティティによって規定される女性が徐々に多くなりつつある。他方、仕事の場合は減少している。労働市場に入るのがだんだんと遅くなっているし、そこから出るのはだんだんと早くなっている。また、仕事による収入の割合は、社会階層の両端において減少してきた。上位階層においては、株式や投機による収入の上昇によって、下位階層では、社会保険手当による収入の増加によってである。

「あなたにとって、幸福であるために最も大切なものはなんですか？」

「あなたにとって、幸福であるために最も大切なものはなんですか？」これが私たちの調査の、最初の質問である。この大きな質問を投げかける際に、相手には、幸福と仕事との関連というこの調査の主題については知らせなかった。この問いの目的が、人々が幸福に対して自然に抱いているイメージや、幸福の探求において仕事が占める役割や位置づけについての最初の手がかりを、いかなる偏見も圧力も入り込まない状態で集めることにあったからである。これによってはたして、仕事に対してなんらかの言及が行われるだろうか？行われるとすればどのようなかたちで？どんな人によって？またそれは、なにかほかの種類の善と結びつけられるだろうか？

この問いは調査に応じた人々にとって、それほど突飛なものには映らなかったようだ。大部分の人から回答が得られたからである（無回答率は2%以下だった）。しかも、彼らはいい加減に答えたわけではない…。哲学者たちが、仕事についてたえず投げかけてきたにもかかわらず、決して満

.....

足な答えを見つけなかったこの問いの豊かさに戸惑うどころか、彼ら回答者は、アリストテレス、ギリシア・ローマのエピクロス派やストア派、パスカル、スピノザ、カント、ショーペンハウエル、カント、さらに時代を下ればアラン、といった人々に続いて、幸福についての自分自身の考えを決然と報告してくれたのだ。

ノルベルト・エリアス¹⁾が羞恥、不名誉、軽蔑といったさまざまな感情について示したことは、幸福にもあてはまる。つまり、それはひとつの後天的な情緒であって、その構造や表現は大部分が文化的・社会的な正当性の基準によって形成されている。この事実からすれば、幸福とは規範、すなわち自己の行動やふるまいを方向づけるための規則を担うもの、ということになる。現在いかに幸福が重視されているかを考えれば、今や幸福は規範のなかの規範ともなっているのではないだろうか。つまり、複数のたがいに対立する命題のなかから、どれを選んで行動に移すべきかを決定させてくれるような規範となっているのである。おそらくそのような理由で、哲学者たちは、幸福とはなにか、幸福を得るにはどうすればよいかといった問いに関してはほとんど合意しなかったが、とにかく真っ先に幸福を定義しなければならないと主張している点では一致している。アリストテレスは、幸福はわれわれがなにかほかのものを得るためではなく、それ自体のために欲する唯一のものであるがゆえに、最高善、すなわち絶対的に望ましいものであると書いた。また、『メノイケウス宛の手紙』（122）のなかで、エピクロスは次のように言う。「幸福をもたらすものはなにかということについて考えなければならない。なぜなら、それがあることによってわれわれはすべてを手に行っていることになるし、それがなければ、手に入れるためにわれわれはいかなることも惜しまないからであ

1) ノルベルト・エリアス、『文明化の過程』。

る」。では、現代において、幸福の正当なかたちとはどのようなものなのだろうか。

6,000 の回答——それだけで 200 ページにもものぼる——をひとつひとつ読んでいくと、最初に目に付くのは、それらの一貫性と同時に、きわめて大きな多様性である。そこには、電報のような文体で連ねられた紋切り型の枠を出ないもの（「健康、仕事、家族」）から、個人的な経験——たいていは不幸な経験だ——を重視するもの（「私は愛する夫を亡くしたばかりなので、ご質問に対して涙なしでお答えすることができません。答えは『夫』です」）まである。こうした両極端の回答の間で、大多数の人は、幸福の公私の側面を分けて考えるという共通の原則の上に立って、さまざまな個人的な考えを表明しようとしている。仕事の恩恵（自己実現、尊敬、高収入、興味など）に加えて、愛情に満ちた豊かな家庭生活（愛、協調、子どもなど）にも恵まれたい、というわけだ。ある失業者は、「社会参加に成功すること、家屋、妻、子ども、家庭をもち、仕事で成功すること。真の家族生活と、社会での立場をもつこと」と答えているし、少し高齢の管理職公務員の回答は、「第一に健康。家族内でよい調和を保ちながら生きること。人生と子どもたちに満足して生きること。多くのよい友人と交流すること」となっている。なかには、個人的な心情や独自の幸福観を主張する人もいる（「朝起きて今日もがんばろうと思えること」）。このようにいくつかの例から、個人がその回答に対して感じている思い入れにもさまざまな度合いがあることがうかがえる。

集まった素材は豊かである。いかに多様なものであるとはいえ、回答の一部は、たしかに紋切り型に属するものであり、年末の挨拶の決まり文句を借りてきているものもしばしば見受けられる（「健康、仕事、家族」）。そのかぎりでは、こうした意見は、いかに個人的なものであったとしても、あまりにも簡潔であるがゆえに、同じ主題について、近親者や精神分析家

や熟練の社会学者が、同じ相手から、突っ込んだ根気強い対話を経て得られるような詳細な報告とはかけはなれたものとなっている。また、社会の異なった集団から得られる文章の密度が不均一であることからわかるように、個人的なものであるとみなされる表現を練り上げ、発する能力が、その人が受けた教育水準の高さに応じて増加していくのも当然のことである。管理職や知的職業に就いている人たちにおいて、用いられる語彙は最も多岐にわたっている。

しかしながら、社会学者の関心を引くのは、回答の内在的な中身よりもむしろ、社会的に差異化された集団の回答間に認められる多様性のほうである。紋切り型でさえ、ある社会集団と別の社会集団との間には明らかな違いがあるのであって、このことが重要なのだ。紋切り型であっても、その構成要素は多様であり、それは労働や実存の条件の格差や、生涯のどの段階にいるかということのほかにも、男女差にも対応しているのだ。集まった回答は、幸福についての真率で個人的な考え——これはアンケート調査という方法によって明らかにすることなど絶対に不可能なのであって、この点に関して統計学者にはあきらめが肝心だ——というよりはむしろ、さまざま大きな集団に固有の支配的な想念をよく表しているのである。

幸福における仕事の位置

最初に目につく結果は、4人に1人以上の回答(27%)が、「仕事」« travail » について、直接的であれ(22%)、同義語のかたち——「雇用」« emploi », 「シゴト」« boulot²⁾ », 「職務」« métier³⁾ », 「職業」« profession⁴⁾ »

2) [訳注] « boulot » : « travail » (「仕事」) のくだけた言いかた。

3) [訳注] « métier » : 社会によって評価あるいは是認されている仕事、という意味合いを含む。

4) [訳注] « profession » : 知性な職業、社会的にある種の威信を得ている仕事、という意味合いを含む。

——であれ（5%）、言及しているということである。この割合は社会的な地位によって極端に変化する。35歳以下の労働者で、失業状態か臨時の雇用状態にある人のうち、幸福を定義するにあたって「仕事」やその同義語を用いている人の割合は65%である。これが専業主婦になると5%にすぎなくなる。回答者が幸福を構成すると考える要素を示すために用いたすべての実詞のなかで、「仕事」という語の登場する頻度は第2位である。「健康」には大きく水をあけられているが、「家族」「お金」「子ども」「愛」「夫婦」「相互理解」よりは上位にある。よって、仕事と幸福は、それほど悪い組み合わせではないように思われる。というのも、大多数の人（98%）が仕事をよいものとしてとらえているからだ。仕事を拒絶するというような、否定的なかたちでの言及の割合は微少なものとどまる（2%以下）。

よいかたちにせよ悪いかたちにせよ、幸福に対する仕事の貢献は、さまざまな哲学的概念の差異を記した分布図にでも頼らないかぎり、理解できない。ある人々にとっては、「ひとつの仕事（un travail）をもつこと」「なんらかの仕事（du travail）をもつこと」が、幸福に到達するための必要条件であるのに対して、すでに生活していくうえで十分で多様な収入を得ている人々にとって、「働くこと」は、幸福の構成要素のひとつをなす活動にすぎない。そしてその場合、幸福はひとつの状態か、自発的な意志によって構築されるひとつの行為とみなされている。たとえば、ここで仕事は、すでにかかえきれないほど多くの花からなる花束のうちの一輪の花にすぎない。必要不可欠な条件であるか、たんなるひとつの構成要素かというのが、調査結果の分析によって明白にうかがえる、仕事の幸福に対する貢献の二つの様態である。

実のところ、「仕事」やその同義語の意味は、それを用いる人の立場によって極端に変化する。46%の人が回答で「仕事」という語を用いてい

.....

るが、このように「仕事をもつこと」と答えることは、仕事をたんに「雇用」(emploi) の同義語として理解し、そのことによって与えられる社会的地位とともに、その仕事が、内容はともかく、とにかく収入源となるという事実を重視することにはかならない。たんに「仕事」とのみ答えること(30%)はもっと曖昧である。このように「仕事」という語を用いる割合が最も高いのは、就職の可能性を最も甚だしく奪われていている人々(若年者)や、最も失業状態にさらされやすい人々(失業者、臨時労働者 *précaires*、肉体労働者 *ouvriers*) においてである。この二つの集団の人々は、「雇用」(emploi) や「シゴト」(boulot) ということばも用いている。公式的な用語であれ、卑下した呼び名であれ、このようなことばを用いることは、自分が弱い立場にあると考えていることを表している。職を求めている者は、アルバイトを志願する者でもあり、この点で職務 (*métier*) や職業 (*profession*) を得ている者と対照をなしている。このような見方は、失業者が仕事について語ることとなんら矛盾しない。

一方、仕事を、「職務」(*métier*)、「職業」(*profession*)、「職業生活」(*vie professionnelle*) と表現し、自己実現の手段(「仕事で満足を得ること」、「仕事において幸福であること」、「打ち込める仕事があること」)や、幸福の多様な構成要素のうちのひとつと位置づける——この場合、幸福は重要性において異なるさまざまな要素がうまく調和している状態と理解されている——態度は、上とはまったく異なっている。この種の回答は最も裕福な層や最も高学歴の層において一番多く見受けられる(被雇用者 *employés* や肉体労働者 *ouvriers* において1%であるのに対して、これらの集団においては4%である)。さまざまな種類の善(収入、家族、子ども、「心を豊かにする」仕事)に恵まれれば恵まれるほど、地上における幸福の源泉の数が多くなるのに対して、なにももたない人にとっては、仕事がせめてもの最小限の善となり、彼らが到達したいと望む段階への第一歩となる、と

.....

いうわけだ。

仕事を幸福の本質的な条件のひとつとみなすのは、労働条件が最も苛酷で、収入が最も低く、失業の可能性が最も高い人々である⁵⁾。他の条件をすべて無視して、対象を職業従事者と失業者に限定して調査すると、仕事という語を幸福の一条件ないし一要素であると考えて用いる可能性は、次の二種類の変動条件に依存しているように思われる。第一の種類は、明らかに仕事に対する個人の立場に結びついている。すなわち、失業にさらされる可能性の大小という変動条件である。「仕事」という語やその同義語は、肉体労働者の43%が用いているのに対して、社長、管理職、自由業者では27%しか用いていない。分析に際して、失業への不安が個人ごとに依存しているのか、それともそれが集団的な認識を表しているのかを判断することはできない。ただ、社会的出自がより庶民的なものになるにつれて仕事とその同義語に言及する可能性が高くなるという事実は、特定の社会集団に固有の集合的な想念が存在するという仮説にいくぶんかの根拠を与えている。そして、説明に際しての第二の立脚点は、生涯のなかのど

- 5) 「仕事」という語が最も教育のない回答者において頻繁に用いられるという事実は、「仕事と生活様態」と題する調査用紙に記入させることを求められた調査者の期待を推測して、たんに、体面を失うことを避けながらも、それに適合するような回答を与えようとしたことの結果だと考える向きもあろう。だが、この語が農業従事者においてはほとんど用いられないし、女性——つましい階層に属していても——においてはもっとまれにしか用いられない（ほかの条件はすべて無視する）ということから、そのような仮説は退けられる。では、失業者は積極的に職を探していると考えられることから、行政官であるとみなされた調査者との公的な関わりという状況で、自分があやしい者ではないと見せるために、彼らが仕事を幸福の構成要素として挙げたという仮説はどうか。だが、このようにつくろうこと（そもそも、そのような事態をどの程度考慮すべきかも疑問だ）は、調査という状況に固有のことではない。そうしたふるまいは、失業者にあって、日常生活における多くの交際の場面で生じるのであり、調査という状況もその一例にすぎない。つまり、調査票において「誇示」され、採取されたこのような仕事への関心は、調査という場面以外においても同様に意味をもち、なんらかの結果をもたらすのである。

の時期にいるかということと、家族内でどのような立場にあるかという差異に注目するものである。これは、男性と女性では同じように機能しない。

男性においては、社会的・職業的な区分（肉体労働者かそうでないか）によって判定される社会的な立場が、決定的な役割を果たしている。これは職業への関わり方についても同様である。失業者（43%）と、定職をもたない給与生活者（45%）は、定職に就いている人（31%）よりもずっと多くの割合で、仕事を幸福の条件として挙げている。妻がいて、とりわけ子どもがいる場合、他の条件を無視すれば、男性が仕事を幸福の構成要素と考える比率はもっと小さくなる。これに対して、女性において、職業や学歴の有無は、仕事が幸福の要素として挙げられるという事実にはほとんど影響を与えていない。仕事に高い価値を認める態度は、男性とは反対に、夫をもつ40歳以上の女性において（職種と学歴を問わないこととする）、極端に減少するが、これは年齢のせいなのか世代の特徴なのかはわからない。あわせて、回答におけるこのような男女差は、幸福についての個人的な考えが、明白な集団的想念によって形成されるということを確認してくれることにも注意しておきたい。

ところで、労働条件が最も苛酷で、収入が最も低い人々において、幸福を仕事に結びつけて考える割合が最も高いという事実は、どう説明すればよいだろうか。同じ調査の結果によると、肉体労働者が早期退職をいとわないのに対して、管理職にある人々は、しばしば定年を過ぎても職業活動を延長したいと考えているのであるが、そうであれば上の事実はますます逆説的なものとなる。同様に、仕事を幸福の構成要素とする管理職あるいは中間管理職の割合がどのような年齢層にあっても一定である（25～34歳：30%、35～49歳：27%、50歳以上：29%）のに対して、被雇用者と肉体労働者において、仕事を幸福の条件とみなす人の割合は、50歳以上

.....

になると極端に減少する（25～34歳：42%、35～49歳：42%、50歳以上：31%）。男性において見られるこのような傾向は、女性においても同様に認められる。一般的により恵まれた労働条件を享受している管理職の人々は、仕事を辞めるのにより大きな抵抗を感じているにもかかわらず、彼らのうちで仕事が幸福の条件だと主張する人の割合が、肉体労働者におけるその割合よりも小さいのはなぜだろうか。

これは、仕事も幸福を構成するほかのどんな要素も同じことだと考えれば、最も単純に説明がつく。つまり、それが欠けていることによってけいに欲望がかき立てられ、その価値をより大きいものとみなすようになる——そしてそのようなつらい状況が持続すればさらにその傾向は甚だしくなる——、という考えである。そこには自然科学的な法則などまったくない。それは、幸福についての想念がなんらかの効果的な規範を示している、そのような規範が——終身年金を受給することとか、宝くじに当たることといったような——まるで不可能なものではなく、社会的に十分実現可能で、許容されたものに映るからにはほかならない。つまり、われわれはここで、哲学者たちが描き出した、欠乏の循環という事態に直面している。「欲望する者は自分に欠けているものを欲望し、自分に欠けていないものは欲望しない」というわけだ。娘を失ったときに、すべての幸福が自分から奪われたことに慄然としたヴィクトル・ユゴーは、次のような有名なアレクサンドラン [十二音節の詩行] に言う。

神よ、あなたが私に幸福を与えてくれたとは

これは、ある職工長が調査票にもっと端的に記したのと同じ感情を示している。

幸福とはなにかを知るためには、まずは不幸になる必要がある。

こうした説明は、不安定な境遇や失業にさらされる度合いが最も高い人々に関して納得がいく。彼らは、仕事がないからこそそれを欲しがっているのだから。この説明はまた、安定的な職に就き、高収入を得ている人々において、そのような望みが顕著には表現されていないという事実を理解する助けともなる。ようするに、社会的階層が高くなればなるほど、仕事への言及の頻度は低くなる、というわけだ。だが、それならば、このような説明原理をすべての要素に適応することで一般化できないだろうか。すると、職業生活と家庭生活の調和、仕事と私生活、愛情と友情、感情生活の豊かさや職業上の成功、などなどの均衡に言及する者は、これらの善を、心の底では自分が所有していないとみなしているからこそ欲しがっている、ということにならないだろうか。彼らはそれらを、欠けているから欲望しているのだろうか。社会の上層部の人々は、仕事に関しては恵まれていても家庭と仕事との調和には不満を感じている、あるいは、仕事があまりにも忙しくて公生活と私生活の均衡による喜びなど味わう余裕がない、ということになるのだろうか。とりわけそのなかでも極度に多忙な管理職や会社社長に関して、この問いを検討してみる価値はある。

しかし、回答者全体に同じ推論を拙速に適用するよりはむしろ、前述のような考察によってわかったことを考慮し、それにもとづいて理論を見つけたことに努めるほうがよいだろう。異なった労働条件や生活条件に従うさまざまな集団の人々は、幸福に対して様々な想念を抱いてはいない。所有、状態、行為をめぐる展開されてきたさまざまな幸福哲学に、最高善の探求において仕事は占める異なった位置づけが対応している。仕事はある者にとっては幸福の必要不可欠な条件であり、ある者にとってはそれを構成する単なる一要素にすぎない。

このように考えれば、回答者のなかで最も裕福な階層が、愛情や生活の調和に不満を抱いているのではないかと疑う必要はもはやない。少なくともこの調査によって判明した彼らの想念からすれば、彼らにとって、仕事は幸福のいくつかの構成要素のひとつである。こうして、定年時に管理職や自由業者が、幸福のひとつの要素を構成するものを放棄することに大きな抵抗感を抱くのはなぜかがよりよく理解できるわけだ。すると反対に、肉体労働者やかつての失業者も、退職以後、仕事によって期待されていた最低限の収入水準が保証されるのであれば、仕事は、幸福の概念のなかで得ていた根本的な位置づけを占めるのをやめる、ということになる。彼らが仕事を得るか、あるいは、仕事によって手に入れられるとみなされるさまざまな善を得ることを可能にしてくれる身分が与えられれば、そのとき以後、彼らは仕事が幸福の根本的な条件であると考えてのをやめるのだ。

最も不遇な人々が仕事に大きな価値を置いている——彼らがおそらくそのありがたさを一番よく理解できる地位にある——という事実は、逆説的ながら、われわれに次のことを教える。すなわち、仕事は最も困難な労働および収入の条件に甘んじている集団の幸福を形成しているのだ、と。そして、幻想は、哲学者が想像するであろうように、最も貧しい人々のほうにあるのではなく、あらゆる種類の善に恵まれ、自己の幸福の実現において仕事が占める役割をおそらく過少に評価する傾向にある人々の側にあるのだ、と。

階級ごとの幸福

大きな主題に即して施される古典的な内容分析の枠内にとどまるならば、回答者全員が幸福の観念に結びつけているいくつかの価値（「健康」「家族」「愛情」「お金」）は、社会的地位の区分を超越して、幸福の普遍的な概念に関連づけられるように見える。しかしながら、そこで用いられる

語彙を仔細に検討すると、意義深い微妙な差異を認めることができる。そこで、この点をより詳しく見てみよう。

第一に、同じことばが用いられていても、その用いられ方は様ではないことがわかる。「家族 (famille)」と書く人々 (男女とも) は、「家庭 (ménage)」「愛」「相互理解」と記す人々とは社会的には異なる立場にいるし、後者の間にもたがいに共通点があるわけではない。異なった語を用いるということは、たんに形式上の区別に帰着するわけでもなければ、同じことを表現しているわけでもない。そればかりではない。数々の言語学者、とりわけサピアとウォーフが示したように、異なった表現は、それぞれに別の事象を指示しているのであり、特定の社会的経験を想定しているのである。幸福を構成するものはなにかと問われて、「健康」と答える場合と「病気ではないこと」と答える場合とでは、同じことを意味しない。前者は、維持すべき自然な状態を指示する、肯定的で一般的な概念であるのに対して、後者はより具体的であり、おそらくその状態を実際に経たことがあるか、その危険性をより重要視しているがゆえに、なによりもまず抜け出すことが肝心であるされる否定的な経験を示している。実際、回答において、「健康」という表現を最も頻繁に用いているのは、健康と道徳性について実施された以前の調査の際に、最もよく病気に見舞われ、余命が最も短い人々であると判明した社会集団である。これと同様に、農業労働者、職人、商人、肉体労働者が行うように、家族の構成員を所有代名詞を伴った親族関係の性質によって指示し、特定すること（「私の子どもたち」「私の夫」「私の妻」「私の孫たち」）が示唆する家族とのつながりの形態は、最も高学歴の集団がするように、もっと抽象的な仕方、「家族生活」「家庭内の調和」「子どもたちとともに愛情ある心地よい生活を送ること」と記すことによって暗示されるものとは、異なっている。前者が後者よりも深く愛情を寄せ合っているというわけではない。そうではなくて、

.....

前者が家族の一員と別の一員との直接的で具体的な絆を重視しているのに対して、後者は、全体的な枠組みの生き生きとして調和のとれた動きや、体系をなす一貫した全体とみなされた私的な空間の内部において保証されるさまざまな関係の質や感情の安定に大きな価値を認めているのである。また、幸福に必要とされる金銭面の条件を指示する際に用いられる語は、その人の裕福さの度合いによってきわめて明確に変化する。最も貧しい集団、とりわけ失業者は「給料」« salaire » と言い、肉体労働者——熟練工もそうでない者も——は、「お金」« argent » と言う。もう少し境遇がよくなると（技術者、中間管理職）、「収入」« revenu » という語が単数形で用いられるようになる。そしてまさにこの収入が増大するにつれて（上級管理職、自由業）、この語が複数形で用いられる割合が高くなる（「諸収入」« revenus »）。そして、最も富裕な層に至っては、心は^{アタラクシア}平靜で、欲望などとは無縁であって、見たところ金銭はもはやそれだけでは幸福を構成するものとはならないようだ。なにしろ、彼らはそれを否定のかたちで語るだけで十分なのである（「経済的に不安がないこと」）。こうして、人々が金銭のことを口にするとしても、それぞれの語り方は一様ではない。その理由は、たんに彼らひとりひとりが同じだけの金額を念頭に置いているのではないからだけではなく、とりわけ、それぞれの想念のなかで、金銭的な条件が幸福に到達するために同じ役割を果たしてはいないからである。

このように、異なった社会階層に属する人々は、幸福に関係する共通の概念（健康、家族、仕事、金銭……）のことを語りながらも異なった表現を用いることで、それぞれに異なった社会的経験を反映した嗜好性を表現している。したがって、いかなる場合にも、それらの用語を同義語とみなすことはできない。この最初の分析からはとくに、自己の見地をより抽象的な表現で普遍化する傾向は、収入源が多様化するにつれて増大していくということに注意しておきたい。用語の配置とそれを用いる人々の社会的

.....

所有物とを関連づけることによって、その配置が示す多様なニュアンスのうち、幸福についてのさまざまな社会的概念と、そのなかで幸福が占める位置づけを探索することができる。

ある年齢に達すれば、幸福のひとつの構成要素である健康が、群を抜いて優勢になる（「若ければ仕事と言いたいが、この年齢になると健康だ」）一方で、仕事、自己実現、愛情、さらには家族に関わる記述の頻度は年齢とともに小さくなり、それが60歳以上の人が使うことばのなかでは例外的になってくる。これはとくに意外なことではない。また、女性が幸福の感情的側面や家庭に関する側面を尊重するのに対し、男性が、職種を問わず、積極的な活動による社会的成功や自己実現の要素により重きを置いているという事実も、現代社会が両性に付与する地位の違いに適合している。だが、回答者たちが直接間接に示唆する幸福の概念は、職業別の集団同士の間で、最も際立った差異をうかがわせる。このような差異それ自体が、人々が仕事と幸福との間に認めるさまざまな関係の原則にかなったものである。

こうして今や、回答者の考えを、幸福についての二大哲学の間にある根本的な区別へと帰着することが可能になる。図式化すれば、ある者にとっては幸福とは所有するものであり、ある者にとってそれは状態かまたは行為するものである。

所有すること

前者の人々にとって、幸福とは、発見し、所有することが可能なものである。幸福は実在し、必要な善を獲得することによってのみ得られるものであり、逆にそうした善がなければ、幸福を得ようという熱意などむなし、と考えるのだ。幸福「である」ためには、まず「所有」しなければならないというわけだ。シゴトやお金をもつこと、健康やよい境遇をもつこ

と、家庭をもつこと、妻、夫、子どもをもつこと、仕事 (travail)、家族、住まい、住居をもつこと……。このような思いはどのような社会集団にも認められるが、幸福への道が、上のようなさまざまな善のいくつかを所有しないことによって中断されていると考える人々の数は、失業者、(熟練であるなしに関わらず) 肉体労働者、さらには(前二者ほどではないにせよ) 被雇用者において明らかに多い。そのような善の第一は「仕事」であり、ついで「お金」、「給料」、「住居」、「家」がくる。私たちの質問に適合して、ここで言及されているのは、幸福そのものというよりはむしろ、それが可能になる最低条件のいくつかである。仕事は他のさまざまな善に至るための鍵であり、ついで、そのような善が幸福への到達を可能にしてくれる、というわけである。

経済的・文化的資本に最も恵まれた集団が、その回答に「もつこと」(avoir) と記す場合、彼らが指示する対象は、その獲得の多くの部分を外的な偶然に負うような善であるよりもむしろ、そのような善を幸福に変えるために適した心理的・精神的な資質である。庶民的な集団においては、幸福が外的な原因にもとづいており、それが欠けることによって不幸を余儀なくされていたのに対して、恵まれた集団における幸福は、多様であると同時に自己の裁量に左右される要素——それが好ましいもの(「家庭生活」「諸収入」「職務 *métier*」「平安」「友情」「職業生活)」であれ、そうでないもの(とりわけ「面倒」や「経済的不安」の不在)であれ——によってもたらされるものとなっている。この場合、幸福の鍵は、このようなさまざまな要素を自発的な意志によって独自に組み合わせることにある。この集団の人々が「調和」や「均衡」という語を使用する割合は、庶民階層の人々の4倍である。また、二者間の差異は、「自由な」とか「自由」という語——それは自由時間について言われる場合もあれば、行動の自由を指す場合もある——の使用に関して際立っている。恵まれた階層における

このような幸福の概念においては、肉体労働者たちが即自的な目的とみなしていたすべての条件が、行動と意志によって集約され、同時に変容されている。仕事をもつならば成功しなければならないし、給与が得られるならその額は高くなければならないし、家族をもつならばそこで自由を感じる必要がある、というわけだ。ただし、上位階層の人々が所有することに重きを置き善と自己の資質との関係については、彼らの考え方は一様ではない。最も裕福な層が経済的余裕（「諸収入」）と平安とを重視するのに対して、とりわけ豊かな教養をもつ人々の集団——教員、医療関係者、芸術家、ジャーナリスト——においては逆に、感情や人間関係（「友情」「愛」「心の交流 unie」「愛すること」「たがいに理解し合うこと」「友人」「愛する」）が大きな役割を果たしている。

幸福を表現するために使われた用語や語彙の選択について言われたことが、ここでも該当する。つまり、最も裕福な集団は、幸福を複数の——自分で作り出した——構成要素同士の緻密な均衡と考えることによって、幸福の概念を精神的なものにとらえる傾向にあるのだ。

状態と行為

さまざまな（善というよりはむしろ）資質を「所有する」ことと、その「状態」にあることとの間には、それほどの違いがないことは了解していただけるだろう。それは表現上の違いであって、実際にはそれほど異なるものではない。同様に、「資質を所有していること」と、それをうまく利用すること、つまり「行うこと」との間にも、ほんの一步の距離しかない。すると、「状態」と「行為」の支持者は、上位階層の人々のなかにより多く見いだされることが理解できる。「状態」の支持者、とりわけ女性にとって、幸福はむしろ、それぞれの置かれた状況や精神状態から発生するなんらかの資質や心境（*état*）である。「～であること」« être » という

動詞が頻繁に用いられる——たとえば「くつろいだ気分であること」« être bien dans sa peau » のような表現で——という事実は、幸福の源泉は、行動によって外界のさまざまな脅威に対抗して獲得された平和な心の状態（「穏やかな」「穏やかさ」「平和」「安心」「快適」「安定な」）だと考えられていることを示唆している。一方、「欲すること」（envie）、「気に入ること」（plaire）、「気に入る」（plaît）などの語が用いられているという事実は、心のもち方と生活の様態との適合を示している。こうして幸福は、行動と個人的な資質の双方に由来する、内的かつ持続的な平和の状態として理解されているのである。「自分自身とよい調和を保っていること」「満足であること」、「夫」や「子どもたちとともにいること」、「子どもたちに囲まれていること」、「家族とともにいること」、「自分自身と平和な関係にあること」、「仕事がかまうまういっていること」、「くつろいだ気分であること」、「愛されていること」、などなど。こうして、「～である」という動詞は裏切らない。「状態」の支持者にとっての幸福は、たんなる怠惰ではない。それは行動によって勝ち取られ、構築されたものである。

行動（「活動」« activité »、「行う」« faire »、「できる」« pouvoir »）、成功（「成功する」« réussir »、「成功」« réussite »）、達成（「実現する」« se réaliser »）に関する語彙の使用頻度は、管理職、自由業、中間管理職においてははっきりと高い数値を示しているのだが、これは、彼らが、構築的で自己裁量の幸福の観念——これもまた結局は平穏な状態に帰着するのだが——を抱いていることを表している。彼らにとって、幸福は事物の集積でも、状態でもなく、行為である。「自分が好きな仕事を行うこと」、「好きなことをすること」、「職業生活で成功すること」、「感情生活を成功させること」、「自分のしたいことをすること」、「旅行すること」、「愛を行うこと」、「家族を生活させること」、「社会に向き合うことができるだけの知的水準をもつこと」、「心から行いたいと思うことを実現すること」、など。

「行為」を支持する者は、単に熱狂を求めているわけではない。彼らにとって重要なのは、自分が行うことが、自分のあり方に適合していることなのである。

最初の概念 [「所有」] とあとの二つの概念 [「状態」と「行為」] との間には、根本的な区別がある。幸福を「所有」に求める人々の見地からすれば、幸福は到達しがたいか、あるいは脅かされたひとつの現実である。幸福を生み出すのに必要なさまざまな善の大部分は外的な偶然に依存していて、それに対して自分はほとんど——あるいはまったく——力を発揮できない。幸運——と「つきのなさ」——がそこで大きな役割を果たすのである。幸福は状況と運に左右されるもので、はるか彼方にあるというこの運命論的な見方（「運まかせ」*« au petit bonheur la chance »*）に、また別の概念が対立している。それによれば、幸福は空から落ちてくるのではなく、地上で、人間の力によって獲得し、構築されるものである。この場合、幸福は、個人の努力と好ましい心理状態に由来し、意志によって作りあげるものとなる。これは「行為」への賛同者に当然あてはまるが、「状態」の支持者——とりわけ女性——にも認められる考えである。彼らにとって、幸福という状態はたいいていの場合、自己による自己への働きかけによって獲得されるものだからだ。

アリストテレスは健在なり

回答者が抱くこのような二つの幸福の概念は、哲学者たちによって知られていなかったわけではない。幸福の可能性に対して悲観的な態度をとるか楽観的な態度をとるかはともかく、すべての哲学者たちは、幸福のはかなさを共通の経験として描き出している。幸福が欲望の究極的な目的であるとすれば、それは逃れ去るものでしかありえず、到達できない地平にとどまる。なぜなら欲望は、満足を得てもさらに灰のなかからたえずよみが

えりつづけ、主体が死を迎えるときまで息絶えることはないという性質をもつからである。こうして悲観論者は、幸福が根本的に不可能であると結論する。その最右翼のひとり、ショーペンハウエルを引用しよう。「欲望はすべて欠如、われわれを満足させない状態から生まれる。したがって、満たされないかぎり欲望は苦しみである。ところが、いかなる満足も決して持続しない。満足は新たな欲望の出発点となる。[……] 努力に終極はなく、したがって際限もない。苦しみは終わらないのだ……」（『意志と現識としての世界』IV, 56）。つまり私は、所有していないものを欲望して苦しむかと思えば、いったん所有すればもはやそれを欲望しなくなるので退屈する、というわけだ。一方、楽観論者は、幸福を別のように定義することで、その可能性を認めている。共通の経験が不幸に彩られているか、あるいはせいぜい暫定的でささいな幸福からなるのは、人が欲望の対象と幸福とを混同しているからだという。幸福であるためには、幸福が欲望されるさまざまな善によって定義されるという思いこみをうち砕かなければならない。幸福は欲望の外にあるのだ、と。

こうして、アリストテレス的な考え⁶⁾では、幸福が所有によって得られるとする幻想に対抗するものとして、行為することにもとづく幸福という上位の（そして唯一真である）形態があるとする。アリストテレスが最初に説明することによれば、幸福は、好ましさを疑いえないひとつの共通経験、すなわち快樂であるという。だが、この快樂は欠如が満たされた状態ではなく、欲望が満足する状態である。それは、快を味わう力の現働化を

6) ここで、エピクロス派、ストア派、スピノザ派の幸福概念を想起するのもよい。それらはすべて幸福の上位でありかつ真である形態を構想しているのだから。これらの哲学において、幸福はまた、欲望の方向を変化させることにある。つまり、欠如しているものではなくて、今現にある世界を欲望させるのである。ただし、このような現実への方向転換は、非行動主義や社会的な保守主義を擁護することではない、という。

ともなうのである。たとえば、哲学者の快樂は思考すること、すなわち思考の力を働かせることにある。したがって、アリストテレスにとって、悲觀的な哲学者（とりわけプラトンのことが念頭に置かれている）が欲望について語ることは、希望についてあてはまるのにほかならない。希望とは、現実に関与しない逸脱した欲望であり、現実を享受することもなし、改善することもない。よって、自己の欲望を意志によって現実のほうに向かわせ、行為する力を享受しなければならないのだ——まさに行為することによって。このような方向転換によってこそ、幸福は逃れることをやめるだろう。こうして、幸福の真の、そして上位の形態は、行為のなかにある。アリストテレスは、「状態」と「行為」という、われわれが挙げた幸福概念の二つの極をひとつに統合し、両者の深い類縁性を指摘する。すなわち、行為はそれが達成する状態に一致しており、また同様に、状態はつねに行為の所産である、というのである。したがって、状態と行為を実際に区別することは不可能である。ようするに、アリストテレスのいわゆる幸福とは、ひとつの力を二重に享受すること——その現働化の作用（行為）と、その結果（状態）を享受すること——である。

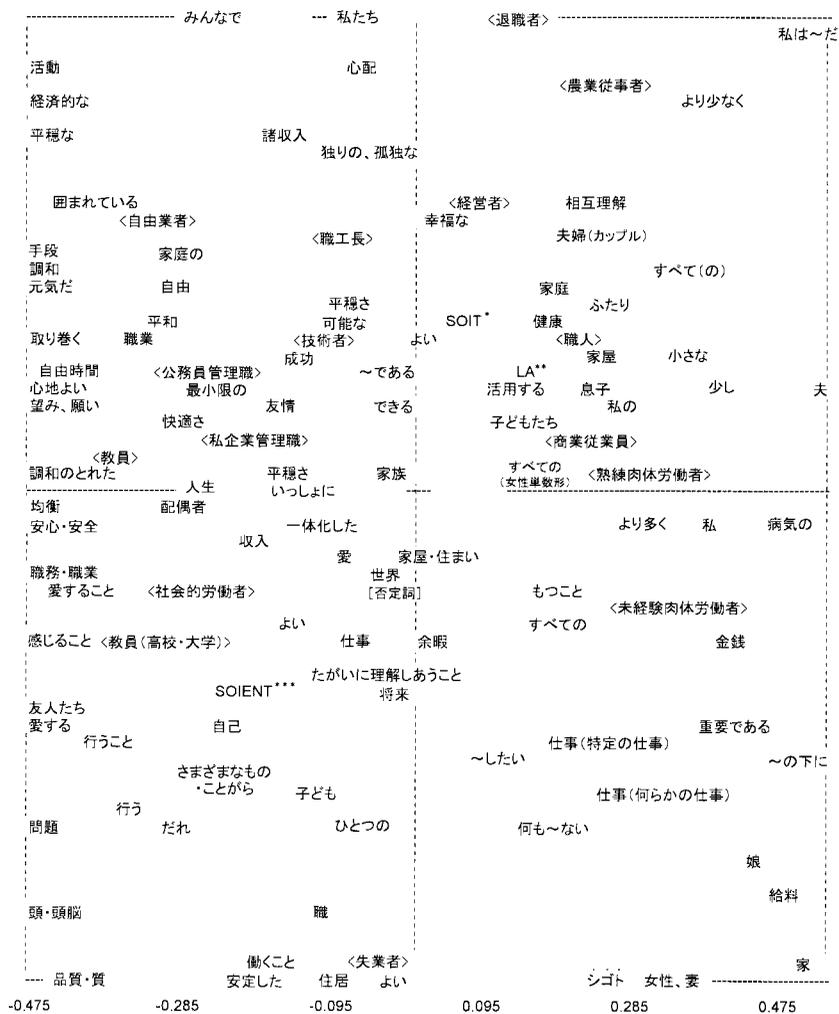
はたして、意志が希望に勝利することによって、だれもが幸福の上位形態に到達することが可能になるのであろうか。そうではない。幸福をわれわれにもたらしてくれるこの活動は、その手段として、身体の善（たとえば健康）と、外的な善（金銭、社会的地位）を必要とする。よって、アリストテレスが言う幸福は、明らかにエリート的な概念である。一方で、教育と訓練、そして有徳な生活こそが、自然なよき精神状態を形成するのに役立つのであるが、これらはまだ徳〔卓越性〕ではなく、なんらかの徳の準備段階となる情念であるにすぎない。たとえば、怒りは正義の、羞恥は節制の準備段階である。これらの情念は、教育によってそこに理性を浸透させることによってはじめて真の徳となる。こうして、生まれつき恵まれ

た地位にあることが、幸福への権利を規定している。なぜなら、ほんの一握りのエリートのみが生まれつきこのような自然の分け前にあずかるにすぎないからだ。他方、社会的身分という法が一部の人間に一定の生活様式を課し、そのことによって、彼らはそもそも幸福とはなにかと問うことすら許されない。つまり、奴隷、職人、商人、子ども、女性たちのことだ。この問題が発せられるのは、物質的な善に十分に恵まれた男性の自由人のためだけである。このような「少数の幸せ者」(*happy few*)だけが、いかに自由な時間を使うかを考えなければならない、というわけだ。アリストテレスのユマニズム〔人間主義〕は、仕事のユマニズムではない。つまるところ、幸福な者とは哲学者のことであるが、それは健康で、外見もよくて、十分な金をもつ哲学者なのだ！

社会学的な考察を哲学とつきあわせてみるのは、きわめて有益なことである。調査の回答者たちは自発的に、はっきりとわかるかたちで、幸福に関する古典的な哲学概念に言及している。しかも、そこには社会的階層の違いが明白にうかがえる。上流層の人々が幸福のいわば上位概念に賛同しているのに対して、庶民階層は、幸福が所有の次元にとどまるという幻想にとらわれているようだ。こうして、幸福の哲学理論に関する社会的な区分は、また別のことも教えてくれる。すなわち、ストア派やエピクロス派の理論に則って、幸福が所有よりもむしろ状態と行為の領分に属すると考える社会集団は、彼らがすでに獲得したさまざまな財の全体を自由に使用できるという点からも、庶民階層と区別される、ということだ。彼らは、幸福の状態に達したりそれを行為したりする前に、すでに——金銭、教育、仕事、家などを——所有している。これに対して、庶民にとってはまだ、所有することが到達目的になっているのである。アリストテレスはこの事態について語っていた。状態と行為によって定義される幸福の哲学的上位理論に到達するためには、それ以前に所有の問題が解決されているこ

.....

とが前提になるのだ、と。そうなると、この調査で、幸福であるためにはまずは所有しなければならないと主張する人々が幻想にとらわれていて、哲学からすると下位の考え方をもちなどというもっともらしい憶測も、まともに受け取ることができなくなってくる。そんなことを言われたら、きっと彼らは、ジュール・ルナールのように憤慨するだろう。「幸福にお金などいらないというのなら、おれにくれよ！」と。



• soit : être (〜である)の接続法現在、三人称単数形
 •• la : 否定詞、女性単数
 ••• soient : êtreの接続法現在、三人称複数形